熱中症の死者また一人ふえたという「またかよ」と
笑うもの独りおり　　加古　陽

酷暑に翻弄された今夏。一首の場面は新聞社の編集部。つぎつぎとニュースが入ってくる。「またかよ」とつい本音を言ってしまった一人。個人的な感想や感慨を口に出すべきではないと考えている彼ら彼女らの中で、一人だけ個人的な思いを口にした者がいた。そんな自制心がほどけた一人に対する批判を「独り」という表現にこめている、と読む。

永遠に真夏のままの絵の中に濃い影があるわたしのような　　吉野美野里

絵画の中の季節は移行しない。絵の中の夏は何ヶ月経っても何年経っても夏である。そんな超越的な夏の影と私が類似しているというのだ。多様な読みが可能だろうが、私は孤独というよりも孤立感を読んだ。それも、かなり切実な孤立感。

クリツクはせずに閉ぢたり子を持たぬわれには遠き猫用バギー　　今泉摩美

「猫用バギー」という不思議な商品が登場する。ここでの「バギー」は「カート」のこと。猫用の乳母車である。話題はネット通販のページなのだろう。猫も子供もいない自分には関係がないの意味だが、「無関係」とはニュアンスのちがう「遠き」という語が採用されている点にこだわって読みたい。やがて子ができるかもしれない、猫を飼うかもしれない、そんなニュアンスを読んでいいだろう。

びゅうびゅうと辺戸の岬に吹く風に微動もせずに輝ける星　　宮地竹史

沖縄本島の最北端の辺戸岬。景勝の地として知られるが風の強いところらしい。荒波が立ち、木や草がふきちぎられそうな強風の中で、微動もしない星。理屈では当たり前ながら、心理的にはその不思議さが分かる。

少しだけ物言ひたげな顔をして古川典子夏に逝きたり　　北川秀子

今月は古川典子さんへの挽歌がたくさんあった。中できわめてシンプルなこの作を選んだ。人間の思いを縁取ろうとするとき、しばしばシンプルな表現の方が短歌としては成功することが多いようだ。

独房を方舟にして銀河まで光速で飛ぶ詩の力もて　　十亀弘史

肉体は拘束されていても想像力は自由にはばたける。このようにややおしゃれな比喩表現に反発する読者も多いだろうが、名詞を多くして固い感じを出して成功していると私は読んだ。

人らみなどこへ行きしか閃光に繋がれ空より垂るるビル群　　岸波千珠子

夜のビル街の稲妻である。稲妻に照らされて幾つものビルが、一瞬、宙に吊り上げられているように見えた、というのだ。「閃光に繋がれ」が、うまい。工夫された表現と思う。

短歌の現在

No.451　今月の15首を読む

佐佐木幸綱